

<凡例>

- I 本書は、東京大学法学部附属近代日本法政史料センタ-明治新聞雑誌文庫が所蔵する「井手三郎文庫」の目録である。
- II 構成は次の四部からなっている。
 - 新聞・雑誌之部(190 タイトル)
 - 和書之部(1322 タイトル)
 - 漢籍之部(281 タイトル)
 - 洋書之部(62 タイトル).
- III 分類、排列
新聞・雑誌之部、和書之部、漢籍之部新学部および洋書之部は「日本十進分類法」に準拠して作成された当文庫分類表に、漢籍之部は「東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録」の編目によりそれぞれ分類し排列した。
- IV 記載事項
新聞・雑誌之部(和漢)および和書之部の記入形式は、原則として「日本目録規則新版予備版(1977)」に、漢籍之部は、東京大学東洋文化研究所漢籍目録の記入形式に拠った。また洋書之部(欧文新聞雑誌を含む)は「Anglo American Cataloging Rules, North American :Text, 1967」に準拠した。
- V 索引
巻末に書名索引と人名索引を付した。和書は五十音順、漢籍は筆画順、洋書はアルファベット順とした。

<井手三郎文庫目録について>

この目録は、その生涯を通じて日中友好親善のために尽瘁された故井手三郎翁の旧蔵図書、新聞、雑誌類を遺択することなく、凡ての資料を収録した。なおこのうち若干の資料は、ご息女皐月氏が遺されたものである。

翁は文久3年5月15日、父理七郎の長子として熊本県飽託郡中島村(熊本市中島町)の名家井手本宅に生まれた。明治7年私塾に入って漢籍を学び、のち進修学舎に転じ、16年済々黌に入学して克堂佐々友房の薫陶を受けた。この頃より日中政経問題解決の志を抱き、学業の傍ら中国語を修得した。20年9月初めて中国に渡り、上海、漢口、北京に滞在して見聞を広め、多くの知己をえて23年春朝鮮を経て帰国した。

明治27年日清戦争に陸軍通訳官として従軍、戦後29年台湾を経由して福州に入り、漢字新聞『閩報』を発行、31年3月同地を離れるまでその経営に当った。同年6月宗方小太郎、大内暢三らと日清「人士ノ情意ヲ疎通」すべく同文会を結成、11月東亜会と合併して東亜同文会が設立されるや推されて上海支部長に就任した。33年2月、同会の機関紙『同文滬報』の経営に参加、翌年翁が直接経営することになった。37年7月1日、邦字新聞『上海日報』を発行しその経営に専念するとともに、居留民団副議長、教育部長、青年団長等の要職を歴任した。

翁は深く仏教に帰依し、円満闊達清濁併呑、有徳の人として日中朝野の名士の信望厚く、また郷党にも敬愛され、11・12回(明45・大4)総選挙には推されて当選を果たした。また熊本海外協会の設立に尽力、以後も物心両面の援助を怠らなかつた。明治20年初渡清以采、50年の長きにわたって日中友好親善に挺身して活躍された翁は、昭和6年病いを発し井手本宅にて療養につとめたが、同年11月16日70年の生涯を閉じた。

翁の没後、ご息女皐月氏が急遽家督を継がれたが、皐月氏のもとにあつて形影相添うように尽された西村須恵氏は、井手本宅の経営一切を取り仕切り、戦後の激変期にあつてもよくその家産を維持されてきた。皐月氏の死去されたあと井手本宅を譲られた西村氏は、単身今日まで遺産の管理に当られてきた。

法学部では昭和48年に同家を訪問し、日記、書翰など貴重な資料の提供を

受けたが、明治文庫はその後にも新聞・雑誌関係資料の割譲方について懇請を重ねてきたところ、56年9月に至って所蔵資料の一切を当文庫に寄贈したい旨西村氏からのお申し出があった。ここに西村須恵氏のご厚意に対して深く感謝の意を表したい。

おわりに漢籍類の整理に際し、本学東洋文化研究所田仲一成教授と所員の方々、総合図書館漢籍担当の方々にご指導を賜わった。記して御礼申し上げる次第である。また日常業務に忙殺されながらもよく協調して目録作成に当たった町井節子、藤井祥子両文庫員に対して、そのご苦勞を多としたい。

明治文庫 北根豊